ロンドンオリンピック 国際信号制作

松本 英士†

1. ま え が き

2012年夏 日本人選手が活躍するオリンピックの競技映像は見やすかっただろうか？ それとも…

感想はさまざまだと思うが、オリンピックの中継で流れる映像の大半を占める競技そのものの映像は国際信号でまかなわれている。

我々フジテレビは北京オリンピックに続き、ロンドンでも柔道の国際信号制作を任せられ、世界でも有数のスポーツイベントであるオリンピックの競技映像を世界中に配信することができた。今回、国際信号を制作した多数の局のなかで、日本からはただ一つの放送局であった。

2. 国 際 信 号

家でビール片手に見ているオリンピックの放送は見慣れたアナウンサーが「この会場で行われます種目〇〇がまもなく始まります！」というフレーズとともに、ユニ*1の放送から始まる。その後、競技や選手の紹介VTRが流れ、競技そのものの国際映像に切替わっていく。試合が終わると、再度ユニに戻り、スタジオの出演者が登場し総評などを行う。

そう、オリンピックの放送は分担作業で成り立っている。

- ・番組冒頭のアナ顔出し＝各局ユニ
- ・VTRなど独自の情報は各局ユニ
- ・競技映像(実況なし)＝国際信号

*1 ユニ：Unilateral Broadcaster. 放送局。

†株式会社フジテレビジョン
"International Feed for Olympic Games" by Eiji Matsumoto (Technical Supervision, Technical Dept., Fuji Television Network, Inc., Tokyo)

表1 ロンドンオリンピックでの競技の担当局

OBS(直轄, freelance含)	水泳, 飛込, シンクロ, 水球, バスケットボール, フェンシング, 近代五種, ハンドボール, セーリング, 射撃, バレーボール, ビーチバレー, レスリング, 馬術
BBC(UK)	ボクシング, カヌー(スプリント), ボート, テニス, サッカー
YLE(Finland)	開会式, 閉会式, 陸上競技
SVT(Sweden)	陸上(高跳び)
SBS(Korea)	アーチェリー, テコンドー
Fuji TV(Japan)	柔道
TVE(Spain)	カヌー(スラローム), トライアスロン, 水泳(10K)
CCTV(China)	近代五種(フェンシング, 馬術), バドミントン, 体操, 卓球
NOS(Netherlands)	自転車(ロードレース), 競歩, マラソン
STV(Slovakia)	ホッケー
ICRT(Cuba)	バレーボール
ERT(Greece)	ウエイトリフティング
VRT(Belgium)	自転車(BMX, トラック, マウンテンバイク)

- ・競技の日本語実況＝JC*2
- ・競技の日本選手のカメラ＝JC
- ・競技の英語スーパー＝国際信号
- ・競技の日本語スーパー＝各局ユニ
- ・競技後のスタジオ, 総括VTR等＝ユニ

この形式がすべてではないが、このように世界中に配信される国際信号をベースにして、ユニと呼ばれる放送権を持つ(ライツホルダ)在京各局が工夫を凝らし、日本のご家庭で応援する視聴者の皆さんに感情移入してもらい、解り易くスポーツを見て頂くために努力をしている。

その中で、番組の大部分を占める競技の国際信号は世界各国の放送局がしのぎを削り制作している。

ロンドンオリンピックでの競技の担当局については表1を参照。

このようにたくさんの放送局が世界中

で流れる国際信号を制作している。その大元締めはOBS (Olympic Broadcasting Service) という会社が行っており、OBSはバンクーバーオリンピックよりオリンピックにおける国際信号制作・運用を一括管理し始めた(北京オリンピックではBOCOGとの合弁企業BOB)。

我々もOBSに雇われている形となり、現地で使用する中継車や特機などの機材や制服, 食事, 航空券, カメラ/音声アシスタントなどが支給される。

3. 仕 事 内 容

スタッフ46名(Producer, Director, AP, AD, Spotter, TD/SW, CG, Audio, Cam, VE, Crane, EVSop)のみ現場に赴き、支給された機材や備品, 現地アシスタントを用いて、良いプログラムを作成し納品する。

納品は各会場にある回線センターのTOC (Technical Operations Center) までであり、現場での内容の評価や補正指示はIBC (International Broadcasting Center) 内にあるQC (Quality Control)

*2 JC: Japan Consortium. NHKと民放各局のスタッフで構成し国際映像に日本語コメントや独自の映像を加えて、JCプログラムを制作し、各局ユニに公平に分配を行う。

図1 現場ミーティング

図2 ケータリング

図3 テレビコンバウンド

での監視体制に従う。

4. 準備

4.1 事前の打合せ

今回のオリンピック準備は2011年2月のOBS本社のあるマドリードでの打合せから始まり、北京オリンピックからの変更点や希望などを話し合った。

ここで念願であったクレーンカメラとワイヤレスカメラの許可を得て手に入れることができた。特に5.1ch制作での評価の高かった畳マイクの使用は当然認められた。その他にレンズの種類や中継車、インカム指示系統についても要望を申請した。

2011年10月、OBSの映像兼機材担当者が世界体操（東京）に視察に訪れ、そこで我々も技術打合せを行った。この時、中継車がUnited社（オランダ）のOB14、OB15となったことを確認。以前、中継で使用したことのある中継車であったため安心することができた。

その他の通常のやり取りはクラウドサービスのDropBoxを使用した。OBSの技術者は通常使用しているようで、柔道技術関係者（スペイン、米国、オランダ、日本）で一つのファイルを変更したり書込んだりするので非常に有効であった。カメラ図やマイク配置図などファイルの量は大量で、以前は送信などで手間が掛ったがDropBoxではスムーズであった。さらにSkypeを用いてテレビ会議も時間を合わせて行った。

4.2 オリンピックにおける信号について

基本は1080 50i、5.1chサラウンドで制作する。

映像において柔道の会場であるExCelには内部に五つの会場があり、そこでの共通指示は、EBUマトリックスの使用と、マスタブラックを通常より1%目安下げを指示され、しっかりとした濃い映像を出すよう指示された。

音声では、5.1chのセンターチャンネルには各国コメンタリーが入るため、薄くIS (International Sound) を出すように指示されている。

画面のSafetyについては、まだ画角が4:3の国が多くあることを鑑みて、事前に映像は14:9での撮影（SDでのOA時は上下に黒い部分が少し出る）を意識するように当初の打合せで聞いていた。しかし、現場入りした後のプロダクションミーティングで変更され4:3意識での撮影を通達された。

バレーボールなどではベースカメラワークが4:3を意識したカメラワークが顕著になっていたようだ。CGは当初より4:3制作であった。

5. 本番

5.1 スケジュール

到着翌日から2日間のセッティング、2日間のリハーサルを経て本番7日間、翌日の早朝には帰国となる。

現場下見もなく、初めて訪れる外国の“その場”にやってきて4日間で本番まで仕上げることに、慣れた通常の技術セッティングだけでなく、競技運営側との打合せや合同リハーサル、照明直しの申請、場内ファイバ回線、ワイヤレスカメラや特機トラブル等々、初対面でかつ国の異なる各担当者たちと話し合う時間もないまま本番まで立上げ

ていくには大変なエネルギーが必要である。

5.2 移動・宿泊

航空券の手配はOBSのあるスペインで行われる。そのため大阪空港からはイスタンブール経由、福岡・札幌からは韓国経由、名古屋からのスタッフは北京経由と、最も経済的な路線が選ばれていた。

宿泊は会場内の管理エリア内にあり、通勤は数分であった。

5.3 現場会場

柔道はロンドン市内の東に位置するExCelにて行われた。ここは大きなコンベンションセンターで、他に卓球、フェンシング、ボクシング、ウェトリフティングが行われ、セット変えをしてさらにテコンドー、レスリングも開催された。

各種目の制作担当は、卓球（中国）、フェンシング（ハンガリー）、ボクシング（英国）、ウェトリフティング（ギリシャ）、柔道（日本）とさまざまな国のクルーが国際信号制作にあたっていた。

5.4 システム

予選時に二つのマットをそれぞれの中継車で、カメラ各8台規模の別々のプログラムを制作。決勝から一つのマットになる。その際、ハイスピードカメラとクレーンカメラが加わり、カメラ17台規模で決勝に挑んだ。

インカムやタリーが予選時と決勝時でグループが異なり、2台の中継車をまたぐため、構築、運用時は注意が必要であった。

5.5 照明

オリンピックにおけるすべての会場

図4 会場内

図5 agile端末

の競技照明は、OBSの一人のデザイナーによって、照度計算、制作され、我々に供給される。客席明かりや入退場付近の照明は大会運営側の扱いとなるため、変更などは時間がかかる(図4)。

5.6 ケーブル

中継車と現場を結ぶ基幹となるファイバケーブル関係は、設置済みで渡される。出先の各ケーブルは自分たちで敷設する。

5.7 特機

我々の会場では、ビューティ用カメラや吊カメ、クレーンなどは米国の特機会社が供給担当していた。

5.8 電源

基本は24時間通電の商用電源(City)で、予備に大型の発々が瞬断なしで切替わるように用意されていた。海外でのF1中継などと同じく、中継車の電源は期間中落とさず、機材は総て通電したままとなる。

5.9 同期信号

同期信号はすべて各会場にあるTOCから中継車へ分配され、各TOCはIBCへの同期を合わせるため、GPSで同期を取っていた。

5.10 CG

北京に引き続きAgileというCGマシンの供給を受けた(図5)。Agileは総ての会場で使用され、簡単に操作でき、スコア入力など出先の端末は時計のOmega社が準備し、そこからデータリンクして取り込んでいた。

デザインなどOBSは視聴者に判りやすいように取組んでいるが、日本国内では日本語のスーパーを上書きしたり、別でスーパーしたりしている。

5.11 ランニングオーダ

オリンピックに関わらず、さまざまな国際信号配信について回るランダウン^{*3}だが、この配信内容スケジュールにあわせて信号の内容を切替えていく。各国のライツホルダは、この形式にあわせて生放送の乗り降りを繰り返す(表2)。

5.12 Pre/Post

ランニングオーダ内の競技前Run upと競技後Run outにはPre-unilateral, Post-unilateralというそれぞれ10分間の枠が三つずつ用意されており、そこへライツホルダが申し込み申請すると、会場内で顔出しをした映像を国際信号そのものに乗せることができる。独自の顔出しシステムなどを持たない局へのサービスであり、ワールドカップサッカー、フィギュアスケートなど、他のイベントでも多く採用されている。

6. 制作時の注意点

6.1 表彰式

表彰式にはフォーマットがあり、この形式に基づいた撮影が求められている。

^{*3} ランダウン：競技前の流れをRun up、競技後の流れをRun outと言い、Run upとRun outを総称してランダウンという。これはオリンピックに関わらず、業界用語として使われている。

表2 Run up (競技前の流れ)

Run-up: Session Start		
+Zero Time	Duration	Content
60:00-55:00	5:00	Booked Unilateral Menu
55:00-45:00	10:00	RH Pre-unilateral "A"
45:00-40:00	5:00	Unilateral "B" Advisory
40:00-30:00	10:00	RH Pre-unilateral "B"
30:00-25:00	5:00	Unilateral "C" Advisory
25:00-15:00	10:00	RH Pre-unilateral "C"
15:00-05:30	9:30	Venue Wide Shot
05:30-05:03	0:27	Countdown Clock
05:03-05:00	0:03	Black

Start of International Signal

+Zero Time	Duration	Content
05:00-04:30	0:30	Opening Animation
04:30-04:15	0:15	Sport Title w/Pictogram
04:15-04:00	0:15	Venue Wide Shots
04:00-03:45	0:15	Venue ID (Mat)
03:45-03:30	0:15	Crowd shots and colour
03:30-03:00	0:30	Event Schedule
03:00-02:30	0:30	Crowd shots and colour
02:30-02:00	0:30	Contest ID
02:00-01:30	0:30	Competitor enter into FOP
01:30-01:15	0:15	Competitor and coaches
01:15-01:00	0:15	Official ID
01:00-00:45	0:15	ID with corner
00:45-00:30	0:15	ID with corner
00:30-00:15	0:15	Venue Wide Shot
00:15-00:00	0:15	Position on Mat
00:00		Event Start

る(図6)。国際信号は公平であることや政治的な内容が含まれないように、メッセージ性のある旗や垂れ幕などは撮影しないよう通達を受けているが、稀に読めない言語などで映ってしまうこ

図7 ベースカメラ

図8 スタッフ一同

図6 表彰式絵コンテ

けた時に映し出される選手の映像は、JCのユニカメラで捉えているということである。なぜなら我々国際信号は、勝者を撮影しているためである。

逆に日本人選手が勝ったとき、国際信号は必ず日本人を捉えている。

特にメダルを取ったときに無理な角度(選手の後頭部等)で遠方から撮った画が出てくることが稀にある。その映像に日本人選手の目の前にいる緑の制服を着ているハンディカメラを担ぐカメラマンが映っているとき、それはJCユニカメラに切替わっている画が日本に届いているのである。我々国際信号は現場では最優先となり、一番良いポジションでの撮影が認められており、国際信号では選手の目の前のハンディカメラが選択されていることが多いからである。

7. 柔道へのこだわり

～臨場感を伝えるために～

2003年の大阪世界柔道から、我々は当時許可されていなかった畳目の前にセンサーカメラを置く許可を得て、選手に近いベースカメラを手に入れ、それにより大勢の観客を背負った映像を撮影することができた(図7)。さらに同大会から畳マイクを採用した。畳と畳の角にピンマイクを多数仕込む事で臨場感のある近い音声を手に入れることができた。

これらのことは5.1chサラウンドの映像制作において、選手に近い画と音という絶妙な組合せとなり、迫力のあるプログラムが制作できオリンピックでも評価を得た。

8. むすび

オリンピックにおける国際信号制作は、このOBS体制でまだ2回目ではあるが、回を重ねることによって、仕上がりも各段に向上し、我々が考える制作意図や効果的な機材運用が認められる手ごたえを感じている。

オリンピックという大舞台で金メダリストが生まれる瞬間を撮影することの緊張と感動は最高であり、今後も携わっていかれたらと思う。

ワールドスタンダードを勉強させて頂くという謙虚な姿勢を忘れずに今後も取組んで行きたい。

次は4年後のブラジルになる。

(2012年10月26日受付)

1995年 フジテレビジョン入社。報道技術部に配属。1998年 制作技術部カメラ班へ。2004年 映像技術部中継VEへ。2007年 制作技術統括部に異動。北京五輪ホストTD/SW, F-1TD, 東京マラソンTP, 世界柔道TD/SW, アイドリングTD/SW等に従事。ロンドン五輪ではTD/SWを担当。

とが他のベニューであったようである。

6.2 勝者

すべての試合において、当然、出場選手の母国の視聴者がいるが、基本的に勝った選手を中心にフォローするため、勝敗の決まった後、負けた選手の割合は少なくなる。

ここで注意したいのは、柔道において日本で流れる放送で日本人選手が負